



乙女ゲームの悪役なんて
どこかで聞いた話ですが 4

柏てん
Ten Kashiwa

RB

レジーナ文庫

シャナン

メイユーズ王国の王子。
魔法によってリシェールに
関する記憶を
失っていたが……？

ベサミ

シャナン王子の
世話役。
人と精霊の
ハーフ。

レヴィ

シャナン王子の学友。
変わり者で
食えない性格。

シリウス

魔導省の長官。
その正体は、天界から
人間界にやってきた
エルフ。

アラン

メリス侯爵家の
現当主。
リシェールの
実の叔父。

カノープス

メイユーズ王国の
近衛隊長。
仕事熱心で真面目な
エルフ。

ラーフラ

気まぐれな
木の精霊。

ミハイル

騎士団員。戦術の天才。
俺様気質で、周囲の人間を
よく振り回す。

ゲイル

騎士団員。ミハイルの側近。
強面だが、おおらかで
優しい性格。

リシェール

乙女ゲーム世界にヒロインの
ライバルとして転生した少女。
だけどひよんなことから
悪役ルート回避に成功して……？

ヴィサーク

リシェールの契約精霊。

登場人物
紹介

目次

乙女ゲームの悪役なんてどこかで聞いた話ですが 4

7

書き下ろし番外編

私の結婚

337

乙女ゲームの悪役なんてどこかで聞いた話ですが 4

1 周目 侯爵家再建

思えば遠くへ来たもんだ。

私はのんびりと温泉に浸かりながら、そんなことを考えた。

日本で普通のOLをしていた私が交通事故で前世の生を終え、転生してから早九年。

いかにも剣と魔法のファンタジー世界といったここメイユーズ国の辺境で、温泉に入り極楽気分を味わえるとは、思ってもみなかった。

この世界での私の名はリシエール・メリス。

乙女ゲーム『恋するパレット〜空に描く魔導の王国〜』、略して『恋パレ』に登場する悪役令嬢だ。

悪役令嬢とは、ゲームのヒロインに嫉妬して悪口を言ったり嫌がらせをしたりする、いわゆるライバル役。そして、ヒロインやゲームの攻略対象であるイケメン達の返り討ちに遭ったりする、咬ませ犬のことをいう。

つまり私は、咬ませ犬のリシエール。

いやいや、そんな風には呼ばれたことは一度もないんですけどね。

それはともかく令嬢というキャラ設定の割に、私は一度もそれらしい生活をしたことがない。

私が生まれ育ったのは、メイユーズ国の中でも身分的に最下層の人々が暮らす、下民街だ。

娼婦をしていた母と、そこで暮らしていた。異常に強い魔力を持って生まれた私は、半死半生の日々を送っていたのだ。体内で暴れまわる魔力のおかげで、何度死にかけたことだろう。

そして五歳のときに母が流行り病で亡くなり、そのショックで私は魔力を暴走させてしまった。

ゲームのストーリーでは、それが原因で下民街が半壊するという、すさまじい事態に発展したのである。でも私は魔力が暴走する直前に前世のことを思い出し、魔力を制御できたので、事なきを得た。

また、すぐに騒動を察知して魔導省長官のシリウス・イーグが駆けつけてくれたのも、被害を出さずに済んだ理由の一つ。彼は白銀の髪を持つエルフで、そのあと何かと私

のことを気にかけてくれている。

ちなみに魔導省というのは、国内の魔導に関する調査や規制を一手に引き受ける部署だ。

さて、莫大な魔力を持つと明らかになった私は、父方であるメリス侯爵家に引き取られた。

今、メイユーズには公爵がいないので、侯爵が貴族の中でも最高位だ。

そんな由緒正しき名門の家が、下民街生まれの私を快く迎え入れてくれるはずもない。私に対して、侯爵は完全なる無関心。そして義母は徹底的に私を無視した。異母兄達も使用人も、最低限しか私に近づこうとしない。

そんな孤独な私を救ってくれたのは、偶然窓から私の部屋に忍びこんできた、シャナン・デイゴール・メイユーズ殿下だ。メイユーズ国の王太子であり、麗しの美貌を持つ王子様。もちろん、ゲームの攻略対象の一人である。

当時の私は、自分がゲームシナリオ通りの悪役になることを避けたかった。だから最初は関わり合いになるべきじゃないと思っていただけで、毎日訪ねてきてくれる彼に、私はいつしか心を開いていた。

それなのに、運命は残酷だ。

そんな小さな幸せすら、たやすくかき消してしまう。

ある日、ベッドで自分の魔力に苦しんでいた私を、王子は危険な術を使って救ってくれた。

しかし騒ぎを起こした私は、義母によって国境近くの森に捨てられてしまったのだ。そばにいたのは私の契約精霊であるヴィサーク——通称ヴィサー君、一匹だけ。

期せずして王都を離れた私は、悪役になる運命を回避できたかのように思えた。でも、命を懸けて私を助けてくれた王子に恩返しすべく、王都へ戻ることにした。

生まれたときからハードモードな人生だったので、非常に諦めの悪い性格に成長していたのだ。

結局、その森で攻略対象の騎士団員ミハイル・ノッドと出会い、彼の協力によって私は王都へと戻ることができた。

そして、ミハイルの片腕であるゲイル・ステイシーが、私を養子にしてくれたのである。なので、今の私の名前はリル・ステイシーという。私としては、今の名前の方が断然気に入っている。

そのあと、王子のお役に立つべく勉強するために男装して騎士団に入団したり、国王への反乱騒ぎに巻きこまれたりと、本当に色々なことがあった。ありすぎだった。

でも、大変なことばかりだったわけじゃない。
ゲイルとミーシャという素敵な両親ができたし、友達もできた。

いつしか私は、この国とこの国に暮らす人々を、愛おしく思うようになっていた。
なので九歳になった私の将来の目標は、王子の側近となって彼の役に立つだけでなく、
国のために働くことだ。

ただ肝心のシャナン王子は、四年前に私を助けてくれたときに記憶をなくしてしまい、
私のことは忘れてるんだけどね。

それでも、彼が生きて元気に過ごしてくれるだけでいいと、私は思っている。
私の胸にある寂しさなど、結局は些細な問題なのだ。

さて、そんな私ではあるが、最近では攻略対象で実の叔父でもあるアラン・メリスにプ
ロポーズされてしまった。

それについて相談しようと、ゲイルの出張先であるヘリテナ伯爵領の街トステオに来
たのが半月前。今度は木の精霊と人間とのハーフであるマーサに取り憑かれて、ミハイ
ルが正気を失っていた。そこで私は彼を助けるため、命を懸けることになったのである。
一時はもうダメかと思ったものの、なんとかミハイルを助け出すことができた。

……九歳にして、私の人生は常にハードモードである。

プリーズ平穩。プリーズ安らぎ。

そんなことを思いながら、私は今日もゲーム世界を生き抜いている。

さて、前置きが長くなったのだけどメイユーズ国最北部にあるトステオで、私は束の
間の休暇を楽しんでいた。

なんと、トステオ近くの山で温泉が発見されたのだ。

この世界には温泉に浸かる文化がなく、煮立つお湯に恐れをなす人々を尻目に、私は
毎日湯治に通った。

いや、別に体は健康そのものなのだ。それでもやつぱり、温泉は日本人の心。そこに
あれば入りたくなるし、入っているととても幸せな気持ちになれる。それが冬ならば、
なおのことだ。

そうしているうちに、日本で言うところの一月にあたる灰月が終わり、白月になった。
いつの間にかやら、半月も滞在してしまっただが、さすがにゆっくりしすぎた気がする。

まだマーサに関わる事態の収拾に追われるゲイルとミハイルに別れを告げ、私は一足
先に王都へ帰ることにした。アランとの婚約についてゲイルに直接相談するという目的
は、達成している。

アランにこれ以上プロポーズの返事を待ってもらわねはいかないし、私がこちら

にいてもゲイルとミハイルの足手まといになるだけだ。私は翌朝に出発することを決め、温泉から上がったのだった。

翌日。白月の朝はまだ凍てつくように寒い。国の最北部に位置するトステオならば、なおのことだ。

トステオの街には、街と荒野を隔てる外壁がある。壁の外にある街道から少し離れた荒野に立っているのは、私とゲイルとミハイルだけ。ほかには人どころか動物の気配すらない。

こんなところでお別れをするのは、私が契約精霊のヴィサ君ことヴィサークに乗って帰る予定だから。彼は普段、猫とも犬とも言える、シーサー似の小さな姿をしている。でも、私を乗せてくれるときは獅子のような本来の姿に戻るの、その姿で街の人々を驚かせないためだ。

「リル。お菓子を買っておいだから、あとで食べるよ。でも食べすぎはダメだぞ」

ゲイルからお菓子だけが入っているとは思えない一抱えもある荷物を渡され、私は苦笑した。

「ありがとう。王都で待ってるね」

「なあ、本当に帰るのか？俺達が仕事をしてるからって、気を遣わなくていいんだぞ。リルはいくらでもここにいていいんだから」

ゲイルはそう言うってくれるけれど、私はそろそろミーシャの顔も見たい。

私が横に首を振ると、ゲイルは残念そうに肩を落とした。

「ほら、お前もなんか言えよ」

ゲイルが隣に立つミハイルを肘でつつく。

しかしミハイルは唇を尖らせて黙りこむばかりだ。

私がアランからのプロポーズを受けると宣言して以来、彼はどうにも機嫌がよろしくない。

婚約はあくまで一時的なもので、アランが落ち着いたら解消するつもりだと、何度も言っているのに。

「はー。ったく、お前はしょうがねえなあ」

ゲイルが大きなため息をつく。

今回の婚約問題に関しては、どちらかというところまで私が何かをしでかすたびに騒いでいたゲイルの方が、冷静だった。

『まあ、リルのしたいようにしろ。嫌になっただけでも婚約を解消すればいいんだから』

そう言うって、すぐに許してくれたのだ。私はいつものようにゲイルの方が怒るんじゃないかと思っていたので、これには肩透かしを食らった気分だった。

とりあえず最初の難関は越えたという気持ちで、私はほっと安堵の息を漏らしたのである。

「だがな、ゲイル……っ！」

ミハイルは何かを言いかけて、やはり口をつぐんだ。

『今回は俺もミハイルに賛成だぜ。今からでも考え直せよ、リル』

空に浮かんでいた小さな姿のヴィサ君が、ぐりぐりと小さな頭をこすりつけてくる。

うむ。今日も安定の可愛さだ。

よしよしと、私は彼の頭を丁寧に撫でた。

そうするとすぐに、ヴィサ君はゴロゴロと喉を鳴らす。

やっぱりヴィサ君は犬というより、猫科なのだった。

「これはリルの将来にも関わることだぞ？ 合意の上で戦略的に婚約を解消したとしても、婚約を破棄されたらと、世間には受け取られる。その前歴は貴族令嬢にとって致命的だ。二人ともそれがわかつているのか!？」

ミハイルは理解できないという顔で私達を見ている。

ここ半月の間、何度見たかわからない表情だ。

「しかしなあ。リルに令嬢らしくしろなんて言ったところで、今さらだしなあ」

ゲイルは諦めた風に言った。

私は今まで、男装して騎士団で小姓をしたり、王子の学友が集う学習室に通ってみたり、令嬢らしくないことを散々してきたのである。ミハイルの指摘はあまりにも今さらだ。

「それとこれとは、別だろうが！ 大体、リルとアラン・メリスは実の兄弟なんだぞ?」

「だから、実は違ったんだってば。正しくは叔父さん。アランの腹違いの兄上である。ジークが私の父親だったんだよ」

私はジークのことを腹違いの兄だと思っていたのだが、真実はそうではなかった。

十年ほど前、侯爵家の嫡男であった彼は、メリス侯爵家でランドリーメイドをしていた私の母マリアンヌと恋に落ちた。

しかし二人はメリス侯爵家によって引き裂かれ、ジークは国外に留学。すでに私を身ごもっていた母は下民街に隠れ住んだ。

実家に帰ることができればよかったのだろうが、母はこの国がある大陸の東部に位置する遠い島の出身だ。身重の女性一人で帰るには負担が大きすぎる。

それに彼女は私に、自分の故郷について何も話さなかった。

きっと母は、故郷との縁がすでに切れていたのだろう。母についてはわからないことも多いけれど、私には、母が優しい人だったという思い出だけで充分だ。

「だからって、その叔父と婚約するなんて、どうかしてるだろう！ だいたい、もしたとえ今のメリス家と縁続きになっても、リルが苦労するだけだ」

ミハイルの苛立たしげな言葉が、母のことを思い出していた私を現実に戻した。そして彼の高圧的な物言いに、なんとなくムツとする。

これまでミハイルは、こんな頭ごなしに私のすることを否定したりしなかったのに。「大変な状態だからこそ、そばでアランを支えたいんだって、何度も言ってるでしょ!？」今のアランは家族を一度に喪くして、一人でも多くの支えが必要な状態なんだよ?」

悲壮な表情で私にプロポーズをしたアランの姿が頭に浮かぶ。

アランの十三歳——成人を祝うパーティーの最中に、ジークは侯爵家で事件を起こした。

侯爵夫妻によって私達母娘と引き離されたジークは、侯爵家を恨み、その転覆を狙っていた。

侯爵は悪い意味で非常に貴族らしい人物だった。厳しい税の取り立てをして領民の怒りを買っていたし、先年の国王への反乱騒ぎに一部囁んでいたという容疑もある。侯爵には正直まったく同情できないが、アランは違う。両親が死に、兄であるジークすらも遠くの領地に幽閉される途中で事故に遭い、死亡したということになっている。本当は、ジークは王子の命令で名を捨て、諸国の貴族の領地運営を監査する旅に出たのだが、ともかく私は、そんなアランに同情よりもっと差し迫った感情を抱いていた。

私がやろうとしていることは、もしかしたら、傷の舐め合いなのかもしれない。それでも、私はアランのそばで彼を支えようと決めたのだ。たとえ彼に、夫婦に必要な感情を何一つ抱いてなかったとしても——

腰に手を当てて声を荒らげた私に、ミハイルは氣勢を削がれたようだった。彼は何かを言いかけ、すぐに口をつぐんでしまう。

それは騎士団第三部隊の隊長を務め、常に即断即決の彼にしては珍しい態度だった。ゲイルが場を取りなそうと私達の間に入る。

「まあまあ。とにかく、道中気をつけるんだぞ? 精霊に乗って帰るんだから、特に危険はないと思うが」

そう言ったゲイルもミハイルも、すぐに見えなくなった。

私の目の前に、白くてふさっとした巨大なものが出現したからだ。

「わかってるじゃないか、人間」

それは巨大化し、誰にでも見えるようになったヴィサ君だった。小さな姿のヴィサ君は、風属性の魔力が強い人でないと見えないのだ。

これこそが、彼の本当の姿。

西の猛き獅子、風の精霊王ヴィサークなのだった。

「ちよつとヴィサ君。急に巨大化したら危ないでしょ」

「だって、いつまでも出発しないんだもんよー。こんなことしてたら日が暮れるぜ」

ヴィサ君は風の精霊の特徴通りせっかちだ。

「王都への到着が遅くなっても困る。リル、ミーシャによるしくな」

ヴィサ君の体を迂回して姿を見せたゲイルが、私を抱き上げてヴィサ君に乗せてくれる。

ミハイルのつむじが見える。彼は不機嫌そうに俯いていた。

「じゃあ、私行くね」

「ああ……」

ミハイルは何か言いたげだったけれど、やはり話をしようとはしなかった。

ただ眉をひそめて、まるで子供のように不安げな顔をする。

それは滅多に見えない表情だった。

一瞬、出発を遅らせてもう少しミハイルのそばにいようか——そんな迷いが生じた。

半月前に湖で見た、彼の悲しげな表情が脳裏によみがえる。

そのときの事件で自らのトラウマに向き合った彼は、まだダメージを回復しきれていないのかもしれない。

その湖は、かつてミハイルの婚約者が事故で亡くなった場所だ。

ミハイルを洗脳した、精霊と人のハーフであるマーサは、追いつめられた末にミハイルと共にその湖で死のうとした。

『森の民』と呼ばれる木の精霊、それも長であるラーフラの協力で事なきを得たが、それでもミハイルを失うかもしれないと思ったときの恐怖は、今も私の胸に焼きついている。

私にとってミハイルは、かけがえのない存在だった。

もちろんゲイルやミーシャ、それに王子も大切な人達だ。ただミハイルへの思いは、ほかの人へのものと何かが違っている。

尊敬よりも友愛に近い。同情というよりは共感に似ている。彼は兄であり、友人であり、頼りになる先生であり、そして……

「おーい！」

そのときだった。

遠くから、私達に近づいてくる物影がある。ガタゴトと重い音を響かせるそれは、馬車だ。

「スヴェン！」

やってきたのは、商人ギルドのトステオ支部長をしているスヴェンだった。

薬色の髪と水色の目を持つ青年で、その鍛え抜かれた体は商人というよりは傭兵みただい。

マーサの事件では、彼にも大変お世話になった。スヴェンがいなければ、無事ミハイルを取り戻すことができたかどうか……

スヴェンは御者台から飛び降りると、油断ならない笑みを見せた。

「遅くなってすまない。実はこれを渡したくてな」

「私に？」

スヴェンが大きな握り拳を差し出すので、反射的にこちらも手を差し出す。

コロンと手のひらに転がりこんできたのは、小さな濃紺の石のついた指輪だ。

「これ……」

それは、トステオを治めるヘリテナ伯爵の城を商談で訪ねた際、彼が商品の一つとして持ちこんだものだった。

石こそ小さいが、その濃紺の石は間違いなく、職人が魔力をこめた魔導石だ。そこそこの値段がするものだろう。

「こんな高価なもの、受け取れないよ」

「これはプレゼントじゃない。先行投資だ」

スヴェンは、闊達そうな笑顔でそう言い切った。

「先行投資？」

「ああ。お前、メリス侯爵家に嫁ぐんだろ？」

「スヴェン、まだ決まったわけじゃ——」

反論しようとするミハイルの言葉を、スヴェンは見事に遮る。

「結婚だろうが婚約だろうが、どちらでもいい。つまり、リルが社交界デビューすることだ。そこで、お前には妙齢のお嬢さん方に、この指輪を宣伝してもらいたい」

「へ……？」

私とゲイルとミハイルは、おそらく似たような表情になっていたことだろう。呆気にとられたというか、なんとというか。

「トステオ山脈で採れる魔石は、これぐらいの大きさの屑石が多いんだ。だからいくら職人が魔導石にしても、市場で安く買いたたかれちゃう。そ・こ・でだ。これから名門貴族に嫁ぐお前に、ぜひ御用達としてこの石を宣伝してもらいたい」

『えっへん』という文字が背後に見えそうなドヤ顔で、スヴェンは腕を組んだ。
「お前なあ……」

ゲイルがあきれたようにため息をつく。

私は手のひらの指輪をじっと見つめた。

宝飾品にはそれほど詳しくないが、元が屑石だなんてわからないほど、指輪についた魔導石は艶やかで綺麗だ。きつと職人の腕がいいのだろう。

「わかった。宣伝するよ。ありがとうスヴェン」

ヴィサ君の上から、私はスヴェンに手を伸ばした。

大きな手と握手を交わす。

「仕事で、俺も近々王都へ行くことになると思う。またな。リル」

私の耳元で、スヴェンは呟いた。

食えない男だったけれど、彼から学んだことは少なくない。

「うん、またね」

手を離すと、ヴィサ君が音もなく上昇する。

三人に向かって、私は手を振った。

「行くぞ、リル！ よく捕まってるよ！」

一度私を落とした前科を持つヴィサ君は、いつになく慎重だ。

「ミハイル、ゲイル！ 先に王都で待ってるから！」

「ああ！」

「気をつけてな！」

ゲイルだけでなくミハイルも返事をしてくれたけど、彼はまだ不機嫌そうだった。

その顔に、ずきりと胸が痛む。

「……あっ」

言葉が続けようとしたら、三人の姿が消えた。

いいや、違う。姿を消したのは私の方だ。

ヴィサ君が、まさしく風のような速度で飛びはじめたからである。

冷たい風が頬を撫でる。

私はただ白い毛皮にしがみついて、ミハイルの表情を何度も思い返していた。



馬ではひと月以上かかる距離も、ヴィサ君に乗ればひとつ飛びだ。

早朝にトステオを出発した私達は、途中の昼休憩を挟んで夕刻には、もう王都周辺にまで来ていた。

ヴィサ君がずっと大型化しているので、契約者である私も魔力を消費していて、若干お疲れモードだ。

早く帰ってミーシャの顔が見たい。

そう思いながら空を飛んでいると、眼下に妙なものが見えた。

「あれ、なんだろ」

「ん？ なんだ？」

緑の草原の中で、日本で言うところの米であるネイの粒に似た白い物が、いくつかの黒い粒に囲まれている。

「ちよつと降りて、ヴィサ君」

「日が暮れる前に王都に入りたいんだろ？」

「すぐだから、ね？」

それは、ほんの気まぐれだった。

私はヴィサ君にお願いして、その黒と白の粒々のもとへ向かった。

ヴィサ君が高度を下げるほど、粒が大きくなっていく。

私はその場所に辿りつく前に、黒と白の粒々がどちらも、ふさふさの毛を持つ犬であることを知った。

この世界の犬は地球の犬とは少し異なっている。

基本的な姿は同じなのだが、こちらの世界では、犬も猫も額に一本ないし二本の角があるのだ。

この世界ではじめて彼らの姿を見たときには、とてつもなく驚いた。

可愛くないとは言わないが、相対すると少しだけ恐ろしい。それがこの世界での犬や猫だった。

「あれ……でもあの犬……」

どうやら、白い一匹の犬を黒い野犬達が取り囲んでいるらしい。

野犬達はじりじりと白い犬への包囲網を狭めている。

白い犬はパツチリとした黒い目で、怯えるでもなく黒い犬達を見つめていた。

「ふさふさした毛足。ぴんと立てられた三角の耳。くるりんと丸まった愛らしいしっぽ——」

「青……星？」

私は目を疑った。

黒い犬達に取り囲まれている白い犬は、前世で私の愛犬だった日本スピッツの青星にそっくりだったから。

しかも、その額にはほかの犬のような角がない。

まさか青星なのだろうか。いや、そんなはずはない。そう思いながらも、私は今すぐに白い犬に駆け寄って抱きしめたい衝動に駆られた。

「ヴィサ君、吠えて！」

「は？ あ、ああ……」

私の突然のお願いに面食らったようだが、ヴィサ君はすぐに迫力ある雄叫びを披露してくれる。

黒い野犬達はヴィサ君の存在に気がつき、文字通りしっぽを巻いて逃げていく。

しかし白い犬は、賢そうな眼差しで私達を見上げるだけだった。

私は着地したヴィサ君から慌てて飛び降り、その白い犬のもとへ走り寄る。

「青、星……？」

そんなはずはないと思いつつ、どこか優雅さすら漂わせるその犬に呼びかけてみる。青星じゃないということは、わかっている。

青星はもつと落ち着きのない犬だった。私を見ればすぐに飛びかかってきて、お腹を撫でてと甘えてきたのだ。

その犬はしばらくの間私を見上げていたが、ゆつくりと私の足元に近づいてころんと寝転び、お腹を出して服従のポーズを取った。

ええー!?! いきなり!?

私は驚いたが、その誘惑には勝てず、白い毛の間から桃色の地肌を覗かせるお腹に手を伸ばした。

柔らかいお腹を優しく撫でてやれば、その犬は気持ちよさそうに目を細める。「なんだこいつ、リルにこび売りやがって！」

ヴィサ君はご機嫌ナナメだったけど、私はそのときすでに決意を固めていた。

「青星。一緒に帰ろう」

そう優しく呼びかけると、彼は心得たというように視線を私に向けたのだ。

「え、リル、そいつ飼う気なのか!？」

ヴィサ君が驚きの声を上げる。

「うん。ここに置いていったら、また野犬に絡まれるかもしれないし。ミーシャにお願いすれば、犬一匹ぐらいは飼わせてくれると思う」

角のないこの犬を、この世界で犬と定義してもいいのかわからないけどね。

「だってソイツ、白くてふさふさだぜ？俺とかぶってるじゃん」

ヴィサ君のご機嫌は急降下だ。

そのとき、何かもさもさとした緑色のものが、私の髪の毛の隙間から空中へと浮かび上がる。

「私も反対である。キヤラかぶりであるゆえ」

仰々しい口調でそうのたまったのは、見覚えのあるしつぽの生えたりもなかった。

「ラーフラ!?」

「お前、くっついてきてやがったのか!」

ヴィサ君も気づいていなかったのか、目を丸くしている。

私は驚きながら、ラーフラの出できたあたりの髪を撫でた。

ラーフラはトステオで私達を助けてくれた森の民の長老だ。

本当は緑の体を持つ男の姿をしていて、このまわりもみたくないな姿は仮の姿——のはずである。もしかしたらこちらが本体の可能性もあるが。

それにしても、ここに来るまでまったく彼の存在に気づいていなかった。驚きである。
「どうしてここに?」

私が尋ねると、まわりも私の視線の高さまで下りてきた。

「人の子、脆弱であるにもかかわらず、我が眷属のため命を投げ出さんとする。我、理解不能なり」

相変わらず、小難しいしゃべり方をするまわりでもある。

「故に、そばで観察することにした」

エヘンと言わんばかりにえらぶっているが、何を勝手に決めてくれてるんだ、まわりもとはいえ、死にかけてたところを助けてくれた相手だから、無下にもできない。

「観察するって言ったって、お前、北の『森の民』の長たる? 森を出てきていいのかわ?」
ヴィサ君がもつともらしいことを尋ねると、まわりもは空中で一回転した。

「引き継ぎは済ませてある。我に手抜かりはない」

「え、森の民の長をやめてきちゃったの!」

それではなんだか、追い返しにくいじゃないか。

私がまわりにもばかり注目するのが気に食わなかったのか、白い犬が私の太ももにちょこんと両足をかけて、立ち上がる。

ああ、可愛い。めちゃくちゃ可愛い。思わず、私は白い犬を抱き上げた。ふわふわの毛皮は極上の肌触りだ。

私にそれに頬擦りしていると、ヴィサ君がつまらなそうにこちらを見てくる。ラーフラは、なぜか白い犬に対抗するように私の頭の上に着地した。

「とにかく、今は王都に入ろう」

日暮れが迫っていたので、私は犬とラーフラを連れてヴィサ君に乗る。

ヴィサ君はぶすつとしたまま空中に浮かび上がった。

思いもよらず、一気に同居人が増えてしまったな。私はため息をつきつつ、口元が緩むのを抑えきれない。

青星と暮らしていた頃の前世の記憶が、私の中に溢れ出す。

犬はとても賢そうな顔つきで、私をじっと見つめていた。

* ❖ *

メイユーズ国近衛隊長カノープスが、魔導省長官であるシリウスの私室の扉を開ける

と、戦場のような光景が広がっていた。

慌ただしく駆け回る人々。

そして幾人かの立ち尽くす人々。

カノープスはそんな人々の間を縫って、目的の人物——シリウスが横たわるベッドへ辿りついた。

人と精霊のハーフであるベサミが、深刻そうな表情を浮かべている。

多分自分もこんな顔をしていることだろうと、カノープスはどこか他人事みたいに考えた。

「いつからだ？」

吸い寄せられるようにシリウスへ視線を落としながら、カノープスは尋ねた。

「昨夜から、だ。世話役が気づいたときには、すでにこの状態だったと」

ベサミの口調は、どこか歯切れが悪い。

カノープスは脈を測るために屈みこむ。

すでに様々な治療が施されたあとなのだろう。白い腕には、いくつものペンタクルが描かれていた。

脈は平常。

つまり彼は、本当に眠っているだけなのだ。ただありとあらゆる方法を試しても、目覚めないということだけだ。カノープスは思案していた。

シリウスと同じエルフである彼も、このような状態には聞き覚えがない。

エルフは全能で強靱きょうじん、そして長寿な生き物だ。

外的な要因がなければ、このような状態に陥おちいりはしない。

考えこむカノープスに、ふと見覚えのない術式じゆしきが目についた。

「これは……？」

治癒ちゆを行うペンタクルの間に、右肩から伸びる黒い文様。

不思議と見る者に嫌悪感を抱かせるそれは、すでに肘まで伸びていた。

「今、魔導省の人間が解説を急いでいるところだ。おそらくは、闇の魔導の類たぐいだろうと」

そう言っ、ベサミが眉をひそめた。カノープスも同じ表情になる。

ベサミはふざけたことをしたりもするが、魔導の大家たか。自分の意見を言い足さないと

ころを見ると、おそらく彼の見解も同じなのだろう。

「困ったことになった……。メイユーズ国の建国以来いらい、未だかつてない危機だ」

ベサミの言葉に、カノープスは黙って耳を傾ける。

「このことがもし周辺諸国にバレれば、力関係が一気に変化するぞ。最悪の場合、戦争になる……」

ベサミは考えたくないというように首を振った。

人間界唯一ゆいのエルフとされるシリウスの存在は、周辺諸国にとって大きな抑止力になつていた。

彼のおかげで、メイユーズはある種の優位性を持って、大国として君臨していられたのだ。

もしシリウスが命を落とすようなことがあれば、ベサミの予想は的中するだろう。

「これからついでいうときにっ」

ベサミが忌々いまいましげに舌打ちをする。

それは病人のいる場所にふさわしくない態度だったが、誰もベサミを責めなかった。いや、責めることなどできなかった。

病やまに臥ふせる国王のかわりに、年若い王太子が国の改革に乗り出そうとしていた矢先なのだ。その中でシリウスを失うなんてことになれば、改革どころではないかもしれない。

「箱口令かんとくれいは？」

「すでに敷いてある。このことを知っているのは、国王陛下と王太子殿下。それにここ

にいるシリウスの部下達と、私達のみ」

「円卓会議には？」

「いずれ知られるだろうが、できる限り時間を稼ぐつもりだ。明日には、普通に目を覚ますかもしれない」

そう言いながらも、その可能性は低そうだとベサミの顔色は語っていた。

円卓会議とは、高位の貴族が構成するメイユーズ国の意思決定機関と、彼らが行う会議を指す。

国王が病気で臥せっている今、彼らは国内で最大といってもいい権力を誇る。

——いや、誇っていた。

メリス侯爵家の一件以来、メイユーズ国は揺れている。

円卓会議の一端を担うメリス侯爵が、王家への反逆の疑いをかけられたまま亡くなったからだ。

若き王子は、このまま円卓会議の権勢を削ぎたいと考えている。

そのためには、常に王族支持の筆頭に立つ魔導省長官シリウスの存在が、必要不可欠なだった。

そしてカノープスは、ベサミとはまた別の可能性を危惧している。

エルフの暮らす天界から、横槍が入らなければいいが……

しかし自らがエルフであることを明かしていないカノープスは、その可能性を口にはしない。

目の前には、まるで蠟でできた人形のように、身動き一つしない美貌のエルフが横たわっていた。

* ❖ *

王都にあるステイシー邸に戻ったあと、私はすぐにゲイルの父親であるステイシー子爵に宛てて手紙を書いた。

婚約の許しを請う手紙だ。

ステイシー子爵は王都から離れた領地において、滅多に王都に出てこない。そのため、貴族社会の情勢やメリス侯爵家の現状なども詳しく書き添えているうちに、手紙はとても分厚くなった。

貴族の結婚は家同士でするもの。それは養子であっても変わらない。

私はステイシー子爵に対して、嘘偽りなく事情を説明しようと思ったのだ。

そしてその手紙を出し終えると、私はやる事がなくなってしまった。たくさんのごたごたのおかげで再開が延期になっていた王子の学習室も、白月はくげつ——二月のはじめに再開されたらしい。

しかしその知らせが届いても、私は素直に登城することはできなかった。

学友の中には、あの晚メリス侯爵家のパーティーに招かれていた者も大勢いる。

ドレスを着て大勢の前に立った私を、王子の学習室に通っていた少年、ルイ・ステイシーだと認識した者もいたかもしれない。

何より、私は女の姿で王子の前に立ってしまった。気持ちの問題的に、もう学習室には戻れない。

戻れないとなれば寂しいものだ。最初は、あれほどつらかったというのに。

そんな私の寂しさを、トステオから王都に戻る途中で連れてきた白い犬「アオボシ」は埋めてくれた。

青星によく似た、「アオボシ」。

家に帰ってから別の名前をつけようと思ったのだけれど、不思議なことに「アオボシ」という名前以外にはまったく反応しないのだ。

困ってしまって、結局彼のことは「アオボシ」と呼ぶことにした。

「青星」ではなく「アオボシ」と少しイントネーションを変えて呼んでいるのは、私の中にまだ抵抗があるからだ。

あの日、元の世界に置き去りにしてしまった青星の身代わりにするようで、やるせないかった。

今まで、ずっと意図的に考えないようにしていたことだ。

私が死んだあと、あの世界で青星はどうしただろう？

父や母は、ちゃんと散歩に連れていってくれているだろうか？ 忘れずちゃんとエサをあげているだろうか？ 寝る前にはハミガキをしてあげて、汚れたらシャンプーで洗ってくれているだろうか？

私が生きていた頃、青星の世話は、すべて私の役目だった。

それを約束して、祖母の家から連れてきた犬だから。

青星は元々、祖母の家に預けられることの多かった私の友達として、祖母がもらってきてくれた犬なのだ。

両親と離れて落ちこむことが多かった私は、愛らしい青星にすぐに夢中になった。彼のことなら、なんでもわかった。

青星だって、私のことはなんでも知っていた。

別に、帰らない私をハチ公のように待っていてほしいわけじゃない。ただ、彼があつちの世界で寂しい思いをしていなければいい。いっそ私なんて忘れて、幸せに暮らしていてほしい。

犬の寿命は、十年と少し。時の流れがこの世界とどう違うかはわからないが、もし同じだとすればきつと青星はもう死んでいる。

最後まで、あの子は幸せだっただろうか？

——ステイシー邸の自室で、私はこちらの世界のアオボシを呼ぶ。

「アオボシ」

するとアオボシは、とてととと寄ってきた。

しっぽを振って、無垢な目で私を見上げる。

彼はあまりにも、青星に似すぎていた。姿かたちだけじゃなく、態度や好物、ほんの些細な仕草まで。

だからかもしれない。最近しきりに、青星のことを思い出すのは。

そして私がアオボシを可愛がっていると、ヴィサ君はつまらなさそうな顔をする。まりもの表情は、よくわからない。彼はいつも口を開けば堅苦しいことばかり言っている。

奇妙な同居人が増えてしまったが、とりあえずステイシー家は平和だ。

季節は過ぎて光月——三月になり、冬の寒さもほんの少しだけ和らいできた、そんな頃。ゲイルとミハイルが王都へ戻ってくるといふ先触れが届いた。ゲイルが戻ってくると聞いて、体が弱く床に臥せていたミーシャも嬉しそうな顔を見せた。

時を同じくして、待ちに待っていた手紙の返事が届いた。

ステイシー子爵からの手紙だ。

ドキドキしながら開けてみると、一枚の紙に『許す』の一言。

反対されたらどう説得しようかと考えていた私は、拍子抜けしてしまった。

さすが変わり者と評判のステイシー子爵だ。息子の養女が落ち目の侯爵と婚約しようが、まったくかまわないということなのだろ
うか。

寛大なのか無関心なのかわからないが、ひとまず私は、安堵のため息をほっと漏らした。さっそく、このことをアランに伝えよう。

そう思い立ち、屋敷を出た。

ついできたそうなアオボシに留守番を言いつけ、私はヴィサ君とラーフラ——これは

勝手についてくる——を連れて、メリス侯爵家に向かう。

服装は、シンプルだが形の綺麗なドレス。

お得意のザ・単独行動は控え、御者付馬車での訪問だ。私ぐらいの年齢の令嬢が必ず連れているお目付け役の侍女はいないが、そこはご愛嬌ということだ。

貴族として婚約するからには、今後は婚約者の恥にならないよう、貴族らしい行動をしなければならぬ。

正直億劫ではあるが、自分で決めたことだ。

辿りついたメリス家の屋敷は、相変わらず贅を凝らした造りだが、どこかひっそりとしていた。

前回来たのはふた月ほど前だが、大勢が集っていたそのときとは、かなり印象が違う。私の訪問を受けて出迎えてくれたのは、見覚えのある老齢の使用人だった。質のいいその服装から見て、おそらく彼がこの家の家令だろう。

彼の表情に、一瞬複雑な色が過ったけど、私は見て見ぬふりをした。

「ようこそおいでくださいました。リシエールお嬢様」

メリス侯爵家の家令が、うやうやしく頭を下げる。

屋敷中の人々からまるでいないもののように扱われた五歳の頃からは、考えられない

態度だ。

『なんだよこいつ！ 今さら……』

『ヴィサ君』

ヴィサ君が身を乗り出す。私は心の声で彼を制止した。

彼が怒ってくれるから、私は冷静でいられるのかもしれない。

「今は、リル・ステイシーと……」

私は家令に向かって、言葉少なに言った。

それ以外に、言葉がなかった。

今さら手のひらを返されたと騒ぐのは、大人げない。まあ、今の私は子供だけどね。だからと言って、何もなかったことのできるほど人間ができてもない。

——王宮に次ぐ荘厳な建物。

この建物を一人で訪れたのははじめてだ。

だからなのだろうか。もう吹っ切れたと思っていたのに、こんなにも心が揺れるのは。これからこの家の当主と婚約しようというのに、こんな弱気はどうする。

私は気持ちを立て直すために、首を軽く振った。

「かしこまりました。主人がお待ちです」

家令の先導に従い、私は広い侯爵家に入っていく。かすかに残るにぎやかな記憶とは違い、ひっそりと静まり返る大豪邸では、メイドの一人ともすれ違わなかった。

その理由を思うと、私は何とも言えない気持ちになった。

「こちらに」

招き入れられたのは、主人が客人と会うための場所だろう。立派な応接間だった。広い空間に、年季の入った品のいい調度品の数々。歴代の侯爵達が、この空間で幾多の客を迎えたに違いない。

しかし今、その部屋の主は成人を迎えたばかりの少年だった。

青年というにはまだ華奢で、その顔色もどこか優れない。

「ようこそ、リル。よく来てくれた」

アラン・リア・メリスは、喪に服していることを示す黒ずくめの衣装で私を出迎えた。トステオから王都に戻って以来、彼に会うのははじめてだ。およそふた月ぶりになる。アランはなんだか急に大人びた様子で、心なしか痩せたようでもあった。

もっと早く彼を訪ねるべきだったと、私は少し後悔した。

「ご面会いただき、ありがとうございます」

とりあえず、私はスカートを摘まんで、上位貴族に対する淑女の礼を取る。

アランはちよつと面食らったようだった。

しかしすぐにはっとして返礼し、ソファにエスコートしてくれる。

つい半年前までは彼といがみ合っていたというのに、なんだかおかしかった。

お茶とお菓子をサーブしてくれた年かさのメイドが去ったのを確認して、向かいのソファに座ったアランは口を開く。

「それで、今日はどういう用件で？」

尋ねながらも、私の来訪の目的を察しているのだろう。アランの目は不安げに揺れていた。

「いただいた求婚のお返事に」

多分、にっこりと笑えたと思う。

しかしそれが逆に不安をおおったのか、アランの表情は余計に優れないものになった。

「リル。疑わしいだろうが、私はお前に本気で……」

「わかってる。だから、私も本気で返事をしに来た」

そのためのドレス、そのための馬車だ。

私だっといういい加減なことはしない。アランの求婚について本気で考えた結果なのだ。

これ以上もつたいぶるのはかわいそうなので、私は意を決して己の決断をアランに伝えた。

「プロポーズ、お受けします」

できるだけ優雅に見えるように、それでいて軽やかに会釈をする。

しかしそれに対するアランの表情は、さながら豆鉄砲を喰らった鳩だった。

ヴィサ君はハアと憂鬱そうなため息をつき、ラーフラは特に何を言うでもなく、ふわと空中を漂っている。

「受け……る？」

「はい。私はあなたの婚約者になります。アラン」

もう一度言おうと、ようやく私の言葉が脳に届いたのか、アランは開きっぱなしになっていた口を閉じた。

いや、そこまで驚かれると、「冗談で求婚したんかい」とツッコみたくなる。

「リル——それじゃあ……」

「でも、結婚はしないよ」

何か言おうとしていたアランに先んじて、私は牽制した。

ふふふ、一塁走者もびっくりの剛速球だ。

「は!？」

「だって、ステイシー家とよしみを結ぶんだったら、婚約だけで充分でしょう？ 五年

も婚約すれば、状況だって変わるよ」

「それはそうかもしれないが、私は本気でっ！」

「だから、私も本気だってば。本気で、私達は婚約に留めるべきだと思ってる。アラン、私はあなたに幸せになってほしい。いつか、本当に守りたいと思える人を見つけて、家のためじゃなくて自分のために幸せになってほしいんだよ」

「馬鹿な！ 私だって本気でお前を幸せにしたいと思ってる！ だから求婚したんだ、

家のためだけなんかじゃない！」

思わずといったように立ち上がったアランを、静かに見つめた。

「……でもそれは、妹としての私をでしょう？ そして、姪としての私をでしょう？」

問いかければ、アランはぐっと黙りこんだ。

「アランのために、私は協力を惜しまないつもりだよ。それが、ジーク……父にかわって、私が負うべき責任だと思ってる。この侯爵家に、アランを独り置きざりになんてしない。私も一緒に、がんばるから」

私はそう言っ、そっとアランの手を握った。

まだ幼さが残る白い手にはペンダコと剣ダコがたくさんあって、彼の努力が偲しのばれる。私はその手の甲に、騎士のようにキスを落とした。

あなたと一緒に私も戦うことを、ここに誓う。

「な……にを」

アランの呆然とした声が降ってきたので、顔を上げた。

急に血色がよくなるアランの顔。

次の瞬間、乱暴に手を振り払われる。わあ。

「恥はずかしいことをするな！」

そして怒られてしまった。ひどい。理り不ふ尽じんだ。

しかし頬を赤く染めたアランが可愛いから、許してやろう。

「リル……」

私の行動によく怒るヴィサ君だけど、今回はどちらかというとききれているようだ。

『人とは難儀。不可解なり』

まりもはアランに見えないのをいいことに、彼の周りをふわふわと漂なまっていた。

少し怒らせてしまったものの、アランは私の意志を信じてくれたらしい。

そのあとは気を取り直して、私達は様々なことを話し合った。



主に婚約に関する細かな取り決めだ。私は、ちゃんとステイシー子爵に許可を得てあることや、それを待っていたから返事をするのが遅くなってしまったことを伝える。

けれど何を言ってもアランは生返事で、先ほどとは打って変わって大人しかった。どうやら、先制攻撃が効きすぎてしまったようである。

会話の狭間、ふとお互いに黙りこんだ。

そのとき本当に何気なく、アランが呟く。

「——それで、お前はもう学習室には戻らないのか？」

今まで聞きたくても聞けずにいたのだろう。彼の顔には気まずそうな色が浮かんでいた。

「というか、戻れないでしょう。王子に見られてしまったもの」

ポロボロに打ちのめされたドレス姿の私を。

一体どう思っただろうか？

性別を偽って学習室に紛れこんでいた私。

一緒に唐揚げを作って、ちょっと仲良くなれた気がした。王子が私を忘れてからはじめて、彼の本当の顔を見られたとも思っていたのだ。

やっと積み上げたほんの少しだけの信頼を、私はまた自分で崩してしまった。いつか王子の役に立って、できるならもう一度、本当の笑顔を見せてほしい。

でもそれは、遠く果てしないことに思える。

「殿下は、何もおっしゃらなかつた。お前がルイだと、もしかしたら気づいていないのかも——」

私の顔色をうかがうようにアランは言うが、その希望に縋りつく気にはなれなかつた。「いいの。それに、これからはアランの婚約者として社交界に顔出しするんだから、学友ごっこはもう終わりにしなきゃね」

寂しいが、それは仕方のないことだった。

私だって、いつまでも自分の性別を偽ってはいられない。

体も徐々に大きくなり、胸も少し膨らみだしている。

ちょうど潮時だったのだ。

「……すまないな。我が家のために」

気まずそうに、アランが言った。

この期に及んで、そんなつまらないことを気にしていたのか。

「何言ってるの。私の家でもあるんだからさ」